

長井庄の初代庄士・斎藤実遠と妻沼・西城について

妻沼ガイドボランティア阿うんの会 阿部修治

◇「大化の改新」と「藤原氏」「斎藤氏」の始まり

七世紀の半ば、それまでの豪族中心の政治から、天皇中心の政治に転換させるに至った一大政治改革を「大家の改新」という。

つまり、日本人には馴染みの深い「元号」は、この「大家の改新」の勲功により、藤原の姓を賜った中臣鎌足が、藤原氏の始祖となり、その後、藤原氏十代目・藤原叙用（のぶもち）が、伊勢神宮の斎宮寮頭に就任し、斎宮の「斎」と、藤原の「藤」から「斎藤」と名乗ったのが、斎藤氏の始まりなのである。

さらに、この斎藤叙用から五代後の越前権守・河合斎藤助宗の子・実遠が、康平五年（1062）「前九年の役」で、源頼義・義家親子の軍に散陣し、勲功を立て、恩賞として長井庄の庄士を拝命している。長井庄に赴任した実遠は、「長井斎藤」を名乗り、長井斎藤氏の祖となり、妻沼・西城を拠点としたと伝わる。

◇実遠の妻沼・西城入城と西城の立地

長井斎藤氏の祖となった実遠は、藤原伊尹（これただ）の一族・幡羅太郎道宗の息・（藤原）助高が、源家所有の旧・妻沼町西城に築いた、西城（長井城）に入城したと伝わっている。

一方、幡羅太郎道宗が、幡羅郡に土着して構えた居館だとの説もあるが、真偽は定かではない。

なお、助高はこの西城を築くとともに、東の守りとしてとしての砦も築いており、以来、里人は西城を本丸、砦を東城と呼び、これが地名の由来となったと伝わる。

また、斎藤実遠が長井庄守護として西城に入ったことで、西城城主・助高は、太田庄・成田郷（熊谷市成田）に居を移し、成田氏の祖となり、その十一代目・親泰は、長井斎藤氏十六代・実治の娘を娶り、忍城に移住している。

時代は下り、藤原助高や斎藤実遠が拠点とした妻沼・西城の地は、後世の土地改良・区画整理などにより、今ではのどかな田園地帯と化している。

しかし、往古は、北東に福川、南は入胎堀と長安寺沼が広がる湿地帯であり、さらに、周囲を長安寺遺跡、鶉森・入胎遺跡、切通遺跡などに囲まれている史実から、この辺りが縄文時代から開けた土地として、早くから人々の生活が営まれて来たと同時に、長井庄の要害の地であったことが窺えるのである。

但し、斎藤実遠から三代目の実盛が、長井庄の別当となった後、領内支配に適した首邑（しゅゆう）の地として、館を西野郷に移したとの説や、初代・実遠が大我井の地に移した、との説もあり、真偽は定かではない。

◇齋藤氏の長井庄支配の集結とその後の西城と齋藤氏

長井齋藤十五代目・利家の時代には、再び拠点をも西城に移しており、これは、改めて戦国期における戦乱に耐えうる要衝の地として考え直されたものと思われる。

しかし、文明十二年（1480）、「長尾景春の乱」で鉢形城を落とされ、敗走する影春をつた西城は、太田道灌の猛攻により落城し、実遠の長井庄士拝命以来、約四百二十年続いた齋藤氏による長井庄支配が終わり、齋藤一族は長井庄から離散している。

現在の西城周辺からは、五百年前の攻防を窺わせる面影はなく、豊かな田園地帯が広がるのみである。しかし、齋藤実遠から三代目の実盛公の足跡は、多くの文芸・芸能等で今も連綿と語り伝えられ、しかも、今や「埼玉の日光」と称される妻沼聖天山本殿の礎を築き、地元熊谷市民にとって、他に誇れる観光・文化の発信地として人々に親しまれている。なお、今では西城や東城の跡地周辺には、中世の面影を偲ぶべくもないが、平成十年には西城本丸比定地に、妻沼郷発祥の栄光を後世に伝えるためとして、本丸跡記念碑が建てられている。



(熊谷市公連だより 第12号 平成23年より)